

1. 主な研究内容について

高次脳機能障害をもたらす日常生活活動における障害、特に復職に関する評価に関心を持っています。その評価手技としては、これまでの作業療法で用いられることが多かった行動観察や神経心理学的検査法に加えて、神経生理学的手法（事象関連電位）を用いています。何故、神経生理学的手法を用いているかの理由は、2点あります。第1にこの手法は1960年代に開発された古い手法ですが、既に多くの研究者に用いられ知見が蓄積されていること、第2に臨床で簡便に課題を遂行している対象者の脳機能評価を行うことが出来るからです。つまり作業療法の臨床において、作業中(特に刺激を鑑別する段階)の脳の情報処理過程に関して、比較的簡便に信頼性のある評価をすることが出来るのです。

いろいろなテーマに取り組んできましたが、どちらかといえば応用的な（日常生活と関係の深い）テーマが好きです。これまでは、高次脳機能障害がある頭部外傷者の復職に関する評価、パーキンソン病患者の上肢動作と視覚刺激の質との関係などをテーマに研究を行ってきました。

今後、高次脳機能障害をひろく捉え、情報処理の観点から作業の治療手段としての有効性を見出したいと考えています。

2. 主な共同研究先

広島大学

3. 今まで指導した学位論文名

〈修士論文〉

『パーキンソン病の行為障害における失行的要因の関与』

『アルツハイマー型認知症患者の上肢操作における予測的戦略の検討』

4. 主な論文

- Y. Naito, M. Yamaguchi, H. Ando : Assessment of Traumatic Brain Injury Patients by WAIS-R,P300,and Performance on Oddball Task Kobe Journal of Medical Sciences, Vol.51,No.5, 95-105, 2005
- 山口三千夫, 内藤泰男, 石川健二, 関啓子, 安藤啓司 : 事象関連電位測定による外傷性脳障害判定の試み, 西宮医師会医学雑誌, 第12巻, 50-53, 2007
- 内藤泰男, 牟田博行, 細本愛子, 戸松好恵, 高畑進一 : パーキンソン病患者の上肢動作と視覚刺激の質との関係, 大阪作業療法ジャーナル, 第20巻2号, 53-55, 2007
- 内藤泰男, 牟田博行, 細本愛子, 戸松好恵, 高畑進一 : パーキンソン病患者の上肢動作と視覚刺激の質との関係(第2報), 大阪作業療法ジャーナル, 第21巻2号, 75-78, 2008
- 山口三千夫, 柳澤正博, 内藤泰男, 石川健二 : 前頭葉挫傷が原因で「抑うつ」が発生するか, 西宮市医師会雑誌, 第14号, 58-61, 2009
- Makoto Matsushita, Kohkichi Hosoda, Yasuo Naitoh, Haruo Yamashita, Eiji Kohmura : Utility of diffusion tensor imaging in the acute stage of mild to moderate traumatic brain injury for detecting white matter lesions and predicting long-term cognitive function in adults., Journal of Neurosurgery, 115 (1),130-139, 2011
- Ishikawa K., Yamaguchi M., Naito Y., Ando H. : Relationship between Hand Dexterity and Cognitive Function - Utility of event-related potentials upon MCI detection and relationship between visual memory and upper-extremity movement capability-, Bulletin of Health Sciences Kobe, 27, 9-17, 2011

5. 現在の指導している大学院生数

M1 : 2名、M2 : 2名、D1 : 2名、D3 : 1名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

研究テーマは、基本にご自身で決めていただきます。ですので、あらかじめ、自分の取り組みたい研究テーマを具体的に示す必要があります。資格は特に問いませんので、研究内容に関心のある方は、事前にご相談ください。